

天眼鏡

地域の力で農業・農村を守る

TPP協定にかかる署名も終わり、各国で協定の承認手続きが行われる次のステップに入った。アメリカでは大統領選挙に向けての候補者選び、日本では甘利TPP担当大臣の辞任もあって、承認を獲得するには時間を要し、各国の批准が出そろふことによって発効するのは2017年となる可能性が高いと見られる。

批准を阻止していくことは難しく、またこれから国内対策が講じられることにもなっているが、TPPの影響を最小限に押しとどめ、農業・農村を守っていくにあたって、まさに地域の力が問われることになる。地域によってその対応に大きな開きが出てくることは必ずである。

和歌山県那智勝浦町の色川地区は、東京から新幹線等をうまく乗り継いで6時間強。東京からは時間距離が最も遠い条件不利地域の一つであるが、地区住民のほぼ半分を移住者が占めているところとして知られている。色川地区のリーダーの一人である原和男さんと先般、ある会議でお会いし、会議後いろいろとお話をお聞きする機会を得た。貴重な示唆に富むお話をいただいたが、これからの地域づくりに参考になることがいくつも含まれていることから、そのいくつかをポイントを絞って紹介してみたい。

一つ目が、原さんは兵庫県出身の都会育ちであるが、色川に住んでみて都会との違いを特に感じたのが人と人との関係性の強さだったという。色川の人たちどうしで激しい議論があった時、別れ際に相手をさんざんののしったあげく言ったのが「おまえとは付き合いはするけど」という言葉だったという。どんなに喧嘩をしても、同じ地域の中において絶交はできない、絶交するわけにはいかないということの裏返しということでもある。またここでも顔をあわせれば「毎度おおきに」と挨拶するそうであるが、大阪でする商売上の挨拶とはどうも違って感じるように感じたという。お互いに助け合って生きてきた長い歴史、そこから自然と湧き上がる感謝の思い、それが「毎度おおきに」という日常の挨拶の言葉になったのではないかと、思い至ったようだ。

農山村にはまだまだ日常の濃い関係性が残っている。さりげなく手を差し伸べあう気運もある。その繋がり感が安心感を生み孤独感・不安感も膨らみきることはない。今の時代、おかしいなと思いつつも「仕方ない」と諦める風潮があまりにも多くなってきている。繋がりを実感出来ないグローバルな経済の流れの中で「個」として辛うじて生きているという状況がその諦めの背景にはあるのではないかと。農山村では、「プライバシーがない」と問題視されがちだが、その濃い繋がり感こそが「おかしいことはおかしい」と言える土壌を与えてくれるのではないだろうかとも思うようになったと言う。

二つ目に、移住者は地域の人になろうと頑張ってきたが、ある時から移住者と地域の人とは違う。違っていることを前提して付き合いしていくほうがいい、と考え方を転換したそう。むしろお互いの違いを生かしていく、役割を分担していくほうが、全体では大きな力になり得る。そのためにはお互いにその違いを認め合っていくとともに、尊重していくことが大事だということでもある。

三つ目に、働き口がなくて外に出ていく若者もいるが、地域で生きていくんだという思い、確信があれば仕事はそれについてくるという。まさに色川での30年余の経験が語らしめるもので、強い思いが地域資源の見直しや創意工夫等を可能にするということなのだろう。

いずれにしても地域を持続させていくためには、外から人を呼び込んでいくことが必須の前提となるが、この外から来た人たちが定着できるか。そしてその人たちが力を発揮して地域の力となっていけるかが大問題である。色川もこうした問題と長年にわたって格闘しながら、移住者を増やし、地域の活力を引き出してきた。原さんの話は都市側にとっても農村側にとっても深く考えさせられる貴重な話である。TPPとの真の戦いはこれからである。

(農的社會デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一)